

## 武蔵野日曜集会

## 聖意体現 (一)

## ——ヨハネ伝第4章27～45節——

1994年6月12日

小池辰雄

わが食物は聖意体現 永遠の生命 キリスト道 全存在で体受 聖意に従うことが楽しい キリストに圧倒されながら生きる

## 【ヨハネ4・27～45】

27時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。28ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいう、29「来りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか」30人々町を出でてイエスの許にゆく。31この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』32イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』33弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』34イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。35なんじら収穫時の来るには、なお四月ありと言わずや。我なんじらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、はや黄みて収穫時になれり。36刈る者は、価を受けて永遠の生命の実を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。37俚諺に彼は播き、此は刈るといえるは、斯において真なり。38我なんじらを遣して労せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに労し、汝らはその労を収むるなり』

39此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。40斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請いたれば、此処に二日とどまり給う。41御言によりて猶もおおくの人、信じたり。42かくて女に言う『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、親しく聴きて、これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

43二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。44イエス自ら証して預言者は己が郷にて尊ばるる事なしと言ひ給えり。45斯てガリラヤに往き給えば、ガリラヤ人これを迎えたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサレムにて行い給ひし事を見たる故なり。



## ●わが食物は聖意体现

<sup>27</sup>時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。

<sup>28</sup>ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいう、

その女は水を汲みにきた。キリストはそこへ行つて

「私に飲ませてくれ。私が分かれば、あなたには霊の水をあげるのだが」

と言つたということが前に書いてある。魂の本当の水、これは聖霊のことです。

<sup>29</sup>「来りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或は

キリストならんか」

非常にドラマチックなところです。

「みな来てごらんさい。私のことを、何も言わないのに、みな知っている。これはキリストではないか」

と。キリストはちゃんと、その人の本質や過去が見えてしまうんだね、大変なひとだな。

「夫がいるか」

と聞いたたら、

「ありません」

と答えたところ、

「五人いたのだけでも……」

なんて、キリストに見られていた。「キリスト」はヘブライ語では「メシヤ」です。「マーシアッハ」という。ギリシア語では「キリスト」「油注がれたる者」という意味です。聖霊を注がれた者。だから、私たちは「キリスト者」というのは、聖霊を注がれていなければ、本当はキリスト者とは言えないわけです。ところが、聖霊を受けてないキリスト者がたくさんいるわけだ。

<sup>30</sup>人々町を出でてイエスの許にゆく。<sup>31</sup>この間に弟子たち請いて言う『ラビ、

食し給え』<sup>32</sup>イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』

「あなた方が知らない食べ物がある」という。

<sup>33</sup>弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』<sup>34</sup>イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。』

こんな答をするひとは他にいない。どんな食物かと思つたら、神さまの聖意を体现することだという。御意を行うこと、これが食物だと。神さまの御意を行うためには、聖霊が来なければ御意は行えない。この聖霊が食物です。霊の食物です。

また、聖霊を水にも例え、火にも例えた。パウロも

「聖霊を消すな」

と言っている。生命の水です。我々の肉体にとつて一番大事なのは空気と水です。空気と



水が無かったら、誰も一時間と生きてられない。空気が無かったら窒息してしまう。気というものは大事なものだ。藤田東湖の詩に

「天地正大の氣」<sup>せいだい</sup>

という言葉がある。肉体にはこの空気がなければダメ、魂の世界には靈氣がなければダメです。我々は空気と靈氣がなければ本当は生きてられない。靈氣の力は凄いね、中国人に氣でもって人を倒すのがある。

「われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。」

という。これは人を救う。人を助けたり救ったりする。そういう業です。それにはこの靈氣がある。それが自分の食物だという。

「御業をなし遂げる根源となるものが我が食物だ」

ということです。

「御業をなし遂げる根源」

とは靈氣です、聖靈です。それが本当の食物だという。

聖靈に満たされると、御靈の力で、ご飯を食べなくてもいいような氣持になってしまう。水だけ飲んでいればいい。断食は我慢ではない。食物を絶つことは、靈氣を食べることです。靈氣を食べれば、聖靈をうちに宿せば、水だけ飲んでいれば大丈夫です。

## ●永遠の生命

35 なんじら收穫時の来るには、なお四月ありと言わずや。我なんじらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、はや黄みて收穫時になれり。36刈る者は、価を受けて永遠の生命の実を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。37 俚諺に彼は播き、此は刈るといえるは、斯において真なり。38 我なんじらを遣して勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を収むるなり』

妙なことが書いてあるね。ヨハネ伝 6・38に、

「38 夫わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。」

キリストは

「私は何も自分ではできない。ただ神さまの御意に従っているだけだ」と仰った。

39 我を遣し給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。40 わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし』(ヨハネ 6・38～40)



とある。

### 「永遠の生命」

というのは、もちろん聖霊がなければ永遠の生命ではない。死<sup>し</sup>ない生命<sup>せいめい</sup>というものは、聖霊が来なければ不<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>の生命<sup>せいめい</sup>にならない。我々の肉体は亡びます。けれども、この肉体の奥に霊的な生命が宿っているから、これは亡びない。肉体が亡びても、今度は霊体をいただいて次の世で生きていく。そういう意味で、我々は死<sup>し</sup>ないわけです。死を乗り越える。

### 「陰府<sup>よみ</sup>の力、死の勝ちはいずこにあるか」

という、パウロの言葉がある。

「<sup>22</sup>然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、潔<sup>きよ</sup>にいたる実を得たり、その極<sup>はて</sup>は永遠の生命なり。<sup>23</sup>それ罪の払う価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。」(ロマ6・22～23)

と。

### ●キリスト道

私は、「キリスト教」という言い方は嫌いになってしまった。決して、キリスト教とは言わない。「キリスト道」です。道なんです。

### 「我は道なり、真理なり、生命なり」

とキリストが言われた。キリスト自身が「道」と言われた。キリスト自身が神さまからの道であり、神さまへの道である。そして、この道に即して我々一人一人が歩くところが路だ。正に

### 「道路」

なんだ。道はキリストで、我々はそれに即するところの路<sup>みち</sup>でなければならぬ。この路は道をもとにしてなければダメです。それが我々の福音的な歩きかたの道路ということ。この道路は一人一人みな違う。他人<sup>ひと</sup>の歩いたところをまた歩く必要はひとつもない。一人一人は誰でもが特別な人生道路、人生航路を歩かせられている。

「宗教」というのは、教えではない——あの教の字は本当はいかん——力をもっている。力をもっていないものは人を生かすことができない。

### 「キリスト教はキリストの教えである」

なんて言っているうちはダメです。キリストは力だ、生命だ、光だ。聖書はそういうもの。凄<sup>すご</sup>い次元の本です、決して意味の本ではない。

### 「この意味はどうだ」

なんて、詮索しているようなのは、「聖書研究会」なんていうものは大間違いだ。

### 「原語が分かればなお聖書が分かる」

と思っている。そうではない。ギリシア語やヘブライ語の奥の神<sup>かみ</sup>の根源語<sup>げんげんご</sup>の響<sup>きこ</sup>きが聞こえ





てこななければダメなんです。

### ●全存在で体受

39 此の町の多くのサマリヤ人、女の『わが為しし事をことごとく告げし』と証したる言によりてイエスを信じたり。

この「信ずる」という言葉がまた観念的になるから困る。

「受けとった」

と言った方がいい。身体で受けとる、体受する。全存在で受けとることを体受という。キリストを全存在で受けとらなくては。全的ということは、それを全部、分解しないで受けとるということです。しかも、その内容は完成した内容ではない。無限なんです。

無限的なものを受けとっていく。ある完成したものはもうそれでお終いです。完成はダメだ、未完成がいい。シューベルトの「未成交響楽」がいい。とにかく、「これでお終い」というものはダメです。私は完全性という言葉は嫌いだ、無限性がいい。キリストの言葉に、

「父の全きがごとく全かれ」

という凄い言葉がある。あの言葉は躓きになる。キリストは

「神さまの全きが如く全かれ」

と仰ったけれども、我々はできっこない。キリストの言葉に躓いている。あの「全き」というものは、むしろ私に言わせれば無限性なんです。「無限無量」ということです。

「無」

という字は「ない」ということではない。字の成り立ちは

「大空の下ひらの甘かんの林」

ということ。四十の林はやしの木の数は数えられるか、数えられない、無数である。だから、「無」は無数を表している。

何でも全的に受けとることの素晴らしかったのはゲエテという詩人です。しかし、大詩人ゲエテも本当はキリストを受けとっていなかった。惜しい。むしろ青年時代のゲエテの方がもつと福音を受けとっていた。ある女性の導きが非常にゲエテに影響した。

40 斯しかてサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留とどらんことを請いたれば、此処に二日とどまり給う。41 御言によりて猶なほもおおくの人、信じたり。42 かくて女に言う『今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、親しく聴きて、

これは真に世の救主なりと知りたる故なり』

「あなたは本当に救世主だ。それが分かりました。普通の人とはケタが違う」と。

43 二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給う。44 イエス自ら証して預言者は己おのれが郷さとにて尊たつばるる事なしと言ひ給えり。45 斯しかてガリラヤに往き給えば、ガリラヤ人これを迎えたり。前に彼らも祭に上り、その祭の時にエルサ



レムにて行い給いし事を見たる故なり。

「いや大変なひとだ」

ということが初めて分かったわけだ。

「預言者は己が郷にて尊ばるる事なし」

という。身近な人たちがその本質が分からない。遠くの人が反って分かる。これは妙なものだ。

### ●聖意に従うことが楽しい

詩篇27篇は非常に慰め深い詩篇です。

「<sup>10</sup>わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。<sup>11</sup>エホバよなんじの途をわれにおしえ、わが仇のゆえに我をたいらかなる途にみちびきたまえ。<sup>12</sup>いつわりの証をなすもの暴言を吐くもの我にさからいて起こりたてり。願くはわれを仇にわたしてその心のままに為さしめたもうなかれ。<sup>13</sup>われもしエホバの恩寵をいけるものの地にて見るの恃なからましかば奈何ぞや。<sup>14</sup>エホバを俟望め、雄々しかれ、汝のこころを堅うせよ、必ずやエホバをまちのぞめ。」(詩篇27・10～14)

「まちのぞめ」という言葉は、質的には「信賴せよ」ということです。時間的に「待ち望め」というのは、質的には「現に信賴せよ」ということです。ドイツ語では「ベフエーレン」という字が使つてある。詩篇27篇は詩篇150篇の中の非常に大事なものの一つです。「幕屋」のことも書いてある。

「<sup>5</sup>われ靈魂をなんじの手にゆだね。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖いたまえり。」(詩篇31・5)

とある。この

「われ靈魂をなんじの手にゆだね」

という言葉が、キリストが十字架の上で最後に言われた言葉なんです。

詩篇32篇も大事な詩篇です。それから、33篇も。

「<sup>6</sup>もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣によりてつくられたり。」(詩篇33・6)

と、凄いことが書いてある。

「<sup>8</sup>わが神よわれは聖意にしたがうことを楽しむ。なんじの法はわが心のうちにありと。」(詩篇40・8)

「聖意に従うことが楽しい」

という。こうなったら本ものです。とにかく、聖書は決して考えられた言葉でもなければ、こつちからだ願った言葉でもない。上から来ている言葉です。だから、力があるし、権



威がある。詩篇のあちらこちらを読んで、大事な所にはサイドラインを引いておきなさいよ。私は創世記から黙示録まで全部、大事なところにラインが引つ張つてある。全巻読んでいる。

### ●キリストに圧倒されながら生きる

ヨハネはパウロと違って、キリストの中にグツと自分を投げ入れて、キリストの生命をそのまま頂いて生きていたような弟子です。だから、十字架のキリストも最後にやはりヨハネに語りかけている。

とにかく、キリストという驚くべき霊的実在に圧倒されながら生きるに如くはなしということです。どんな事があつても大丈夫です。運命・環境の如何にかかわらず、いろいろな事にでつくわせば逆に力がくる。力のない宗教はダメです。キリスト教ではない。キリスト力なんだ。キリスト道、キリスト力です。教えたと思うから、おかしいことになる。キリスト教という言い方はダメだ、せめてもキリスト道と言わなければ。

「我は道なり。みんな、しつかり歩け」

というわけだ。「信ぜよ」ではない。

「歩けよ」

なんです。

私は無教会の時に散々、

「信仰、信仰」

と言われてきた。

「信仰のみの信仰」

とか、

「行いは問題にしないでいいから、信仰しろ」

とか、

「信仰がなければダメだ」

とか。「信仰」という言葉にすっかり飽き飽きした。二言目には「信仰」と言う。今の私は、

「私は信仰なんかありません。在るのはキリストだけです。こっち側の信仰が何に

なるか」

と言つてやる。私の『無者キリスト』や『無の神学』に驚いたのは、そういう気合で書いているからです。だから、アメリカ人がびつくりしてしまった。それくらい、一般の神学者は宗教書を頭で書いている。

もちろん、アッシジのフランチェスコとか、タウラーとか、エックハルトとか、ああいう連中はみなもちろん霊的です。マルチン・ルターももちろん霊的です。ルターはかなり理屈が多いけれども、とにかく宗教改革者だから大変なものです。ゾイゼというのなかなか凄い。『イミテーション・オブ・クライスト』（キリストに倣いて）を書いたトマス・ア・



ケンピスも凄い。本の名前の「イミテーション」という言葉は嫌いだけれども。「イミテーション」ではないんだ。

とにかく、あなた方はみなそれぞれ、この福音を受けたら使命がありますから、本ものを伝えてください。もったいないですよ、この福音は。自分でしまっていたら腐ってしまふよ、人に流していかないと。泉のごとく、滾々と湧きいでて流れていなければ。

あなた方はご自分で聖書をじっくりお読みください。聖書は聖書自身で注解していけばいいので、何も参考書なんかは要らない。聖書はただ読むのでなくて、読み入る、読みながら聖書の中に自分を入れなければダメです、読入しなければ。

「分かりました」

というような表現をしないように。「分かりました」ではない、

「受け取りました」

と言う。

「分かる、分からない」

という世界ではない。

「受けとったか、受けとらないか。その中に入ったか、入らないか」

ということ。体受、読入です。要するに、聖書の次元と、一つになるということです。

サマリヤの女の所を読んだら、自分がサマリヤの女になってキリストに救われたらいい。自分がマグダラのマリヤになってキリストに全身でぶつかったらいい。ナルドの香油の壺を割って、

「もうこの壺は使わない」

と言って全部キリストに注いだ、あの女の愛にキリストは感激した。

「この女のしたことは福音の伝えられる所いずこにも語り伝えられる」

とキリストは言った。

すべてが全身的でなければダメです。部分的なものはダメです。

